

D-4 名取市北釜地区

2012年1月24日(火)

報告者名	沼田 愛	被調査者生年	① 1931年(女)、② 1928年(女)
調査者名	島村 恭則	被調査者属性	両氏は姉妹で、北釜地区生まれである。
補助調査者	沼田 愛		

地域概要（一部、2012年1月23日のA氏への聞き書き調査(D-1)の成果を含む）

北釜地区は名取市の沿岸部、閑上地区の南側に位置する集落である。稲作や畑作のほか、かつては漁業も行っていた。また、戦後は製塩を行うひといた。

地区の自治は、北釜地区の全戸が加入する町内会が担っており、これは契約会を前身としている。地区内は、東町（ヒガシチョウ）、西町（ニシチョウ）、前町（マエチョウ）の3つの組に分かれている。さらに各家では、近所の5軒ほどの家で組む五人組と、五人組の範囲を超えて10軒ほどで組むトナリグミ（隣組）を組織した。五人組や隣組は主に葬式の相互扶助を行った。

西町には、旧下増田村の村社でもある下増田神社と、山の神神社がある。北釜地区の住民は下増田神社の氏子である。神社の西側には、観音寺があり、観音寺が管理する墓地には宗派を問わず北釜地区の住民の墓がある。

北釜地区内で屋号がついている家は、比較的古い家だと言われている。地区内には櫻井姓や森姓が多いが、必ずしも本分家関係にはない。また、戦後の引き揚げ者も数名居住していた。

漁業

むかしは漁業をしており、カクアミ漁の船を出していた。北釜の浜から10人くらい乗った船を出し、網を海に沈めておき、翌朝その網を取りに行く。春はイワシ、秋はサケが獲れた。ほかにもアジやカニ、タイなどが獲れた。冬にはマンガンという大きな鉤状の道具で砂地をひっかけ、ホッキ貝を獲った。漁は20年ほど前から行われていない。

漁には男性だけが参加し、女性は船に乗ってはいけなかった。女性の乗船が禁じられているのは、女性は月経があり、穢れるためだと言われていた。女性は浜で船が戻ってくるのを待ち、獲れた魚を自転車に積むか駕籠に入れて背負い、売りにいった。行商して売りに行く女性をイサバといい、下増田地区の内陸部まで売りに行った。

船と網を持ち、漁師を使うひとのことをヤヌシ、もしくは網主、船主と言った。船主は春になると、その年の漁に使う太い縄を縛うためにひとを集めた。縄は網を海に入れる際に使うものだが、話者は詳しくは分からないという。

船主は経済的に豊かなひとで、数軒あった。たとえば、屋号シンヤ（新屋）と屋号トウフヤ（豆腐屋）である。新屋のB氏は元下増田村長である。豆腐屋は、C氏とD氏の父子の家で、C氏はかつて下増田村役場に勤める重役であった。新家と豆腐屋は同姓だが、本分家関係にはない。

下増田神社

下増田神社は、かつて空港神社だった宮をムラ（北釜）のひとたちで1週間から10日間ほどかけ、道路に丸太を敷いて運び、下増田神社の宮として移築したものである。それ以前から下増田神社の宮はあったが、それは、震災後も残っている宮の前にあり、そこにまつりのときは集まった。東日本大震災の津波により、空港神社から移築した宮だけが残った。

山の神講

話者は、北釜の山の神は、小牛田の山の神（宮城県旧小牛田町の山神神社）の姉にあたる神様だと母親に聞いた。山の神講で小牛田の山神神社に参拝したことはない。話者は個人的に小牛田の山神神社に行ったことはあるが、孫が生まれたときには北釜の山の神神社に参拝した。

山の神は出産の神で、出産をするひとが参拝に来る。参拝しに来たら、供えてあるおまくらをひとつ借りて帰り、抱いて寝る。子どもが生まれたら、自分でまくらをもうひとつ縫って、借りてきたまくらと共に山の神神社に返す。

現在北釜の山の神神社がある場所は、以前は宮はなく、小さな印のようなものがあっただけで、墓場であった。話者が小学校に入学する頃に宮を建てた。宮を建てる際には、人骨をモッコ（縄を縛って四角い入れ物にし、天秤棒にかけ）で運んでどこかに埋めた。どこに埋めたのかは分からない。

山の神講には、かつては北釜地区の50人ほどが所属していた。ほぼ全世帯の女性が加入していたが、加入しないひといた。年をとってきたら自分は講を休み（脱退し）、嫁に渡す（代替わりをする）。役職についているひとは、年配になっても加入し続けた。彼らの名前を書いたものを、山の神の石碑に巻いていた。

話者は、別当のE氏に山の神はお産に関することだけの神様ではないと言われたので、役職にはついていないがずっと加入していた。現在は嫁（60代）に渡している。山の神講に加入しているひとは減っている。

山の神神社では春と秋にまつりがあった。まつりには仙台方面からも参拝者が来た。別当（神主）にお祓いをしてもらい、参拝者に社務所で御馳走を振る舞った。山の神講では当番をたて、手伝いをした。4月頃の春のまつりでは、油揚げを入れた炊き込みご飯で、10月頃の秋のまつりでは、サケを入れた炊き込みご飯や、なますなどを用意した。鮭は、北釜の浜でカクアミ漁をする際に獲れたものを使用した。現在はまつりはしておらず、別当に拜んでもらい、御寿司を食べるだけで、神社には集まらない（社務所で共同飲食はしない）。また、山の神講はまつりのとき以外に集まることはなかった。

十二神様

十二神神社は北釜地区の神様ではなく、個人の神様で、10人くらいで祀っていた。講ではない。集まるのは、4月のまつりのときの年に1度だけである。

十二神様は、高館の神様が北釜に移った神様とか、分かれてきた神様と聞いているが、詳しくは分からないという。

毎年4月におまつりがあり、「十二神様のまつりがくる」と言われると集まった。話者が子どもの頃は、十二神神社にハタ（のぼり）を立て、お参りをしてから、宮の前に筵を敷き、そこで赤飯や酒で酒盛りをした。その後は酒盛りは当番の家でやるようにした。当番は4名ほどが、持ち回りで務めた。神主は呼ばない。まつりの日に建てるハタ（のぼり）はF氏に預かってもらっていた。

震災後、平成23年10月頃に、高館の神主に来てもらい、ゴシンイン（神様の魂）をとって、高館の神社に移した。高館の神社の名前は分からない。

氏神

屋敷の神様（氏神）を祀る家は多く、ほとんどが屋敷地の西側の角に宮をおくが、家の前におく家もあった。宮の位置を動かす場合には拜んでもらう事はあったが、それ以外に神職に拜んでもらう（禊でもらう）ことはない。氏神には正月に赤飯や餅を供えた。

屋号

屋号サガリは、道祖神を祀っている。この家は愛島の道祖神が海水に入って清めるために下りてきた際に、休んだ家だと言われている。神輿が来たのではなく、神様が下りて来て、サガリで休み、海に入って愛島に帰っていった。サガリでは、道祖神の宮を、屋敷の神様の宮の隣に祀っている。サガリは、防風林を越えたところにあった。

この他に屋号がついている家は以下の通りである。屋号トウニシは西町の貞山堀のすぐ東側、屋号トウフヤ（豆腐屋）はトウニシの北側、屋号カミスキヤ（紙漉屋）は以前紙漉をしていた。ほかに、屋号マエチョウ（メエチョウ）、船主であった屋号シンヤ（新屋）、屋号シntax（新宅）があった。話者①の家と、話者②の家には屋号はない。

帰農者

現在駐車場を経営しているG氏は、以前夫婦で製塩をしていた。G氏は頭の回るひとで、鶏をおいたり、麦芽で飴を作って売ったり、お金になることにすぐに切り替えてやったひとだった。空港の利用者をにらんだ駐車場の経営も、北釜で最初に行ったひとである。G氏は北釜出身であるが、憲兵隊に所属していて、戦後に引き揚げてきたキノウシャ（帰農者）になった。その際にもらった田圃を埋め立てて、駐車場にした。

北釜には、G氏のように、戦後に引き揚げて来て農業を始めた帰農者が5、6人いて、その中には北釜の出身ではないひともいた。帰農者のなかには傷痕軍人もいた。

帰農者には田圃と畑が5反くらいずつ貰えた。この面積は農家として食べていけるくらいの農地ということである。帰農者は、引き揚げ者ではないひとでも数名誘い、組合を作っていた。引き揚げ者ではないひとでも誘ったのは、組合設立を認めてもらうための人数を確保するためである。